

欲望カルテ

普通の人にはたどり着けない場所、その扉を開けられるのは、限られた人だけ――

「ここ？」

雑居ビルを見上げ、浅葱優は眉をひそめた。

今の悩みに唯一答えをくれる場所、ようやく調べてたどりついた場所がこんなところだとは思わずに半ば落胆しながらも階段をあがっていく。

縋れるところはこしくない。そして、目当ての看板を見つけると、そのドアを開いた。

古びた雑居ビルの中だとは思えないほど明るい部屋。突然世界が変わったような錯覚に驚きながらも受付に向かうと優が勇気を振り絞って声をかけた。

「あの……予約を入れていた浅葱です」

「浅葱優さんですね。お待ちしていました。診察の前にカウンセリングがありますので、こちらの部屋にどうぞ」

受付の男性に案内され、手前の部屋に入ると、男性がいて、カルテを広げていた。

「浅葱さんですね」

「はい」

「痴漢に遭うのが悩みだということで伺っていますが、詳しく聞いても大丈夫ですか？」

「はい」

少し緊張しながらソファに腰を下ろすと、甘い香りがして少しだけ気持ちが落ち着いた。

「いつから痴漢に遭いはじめましたか？」

「ひと月前から……実際は一年ぐらい前からあったんですが、電車を一時間ぐらい遅くして痴漢を避けてたんです。でもひと月前からひとりの人にズボンを下ろされて、そのお尻に……」

「ああ、お尻の中を弄られるようになったのですね。指ですか？」

「指も……あと変なぶるぶるするものとかも……」

思い出しただけで恥ずかしくて頬を赤く染めながら答えると男がカルテに言葉を書き留めた。

「それを使われるとどんな感じがしますか」

「気持ち悪くて怖くて……だけど、変な感じがして……」

「変な感じがして射精をしちゃうんですね」

「はい……イっちゃいます……」

優の言葉に男が書くのを止めて優の顔をジッとみた。

「イクという言葉は知っているんですね」

「はい……痴漢がいつもそう言うから……イケとか、いったんだろとか……」

「絶頂を迎えることをイクというので、正しい言葉ですね。他に気になることはありませんか？」

「ありません。ただ怖くて……」

「分かりました。先生の診察がありますので、このまま受付で待っていてくださいね」

男に言われ頷いて部屋を出ると、落ち着かない気持ちで待合室で待つ。

やがて優の名前が呼ばれ、診察室と書かれた部屋に入ると、白衣の男が先ほどの男と共に部屋で待っていた。

「浅葱さんですね」

「はい」

「座って」

「時間を変えて電車に乗っても痴漢に遭って困っていると」

「はい」

「それは困ったね。しかもいつっちゃうんだ」

「はい……」

恥ずかしくなった優が俯くと、医者が指を差しだした。

「痴漢になにか言ったことは？」

「男なのに痴漢に遭ってるなんて周りにバレたくないから言えなくて……」

「そうか、それじゃ、治療をはじめよう。指を見て」

医者に言われた通り指を見ると医者がゆっくりと指を動かす。

「1、2、3……はい、浅葱さん服を脱いで」

医者が指を離し優にそう声をかけると、立ち上がった優が服を脱ぎ始めた。

「綺麗な体をしているね。そうだな。まずは感度の検査からしようか。机に手をついえお尻をこっちに向けてごらん」

視線を空に泳がせたままの優が机に手をつく、突き出すように尻を医者へと向けた。

「これじゃ肝心な場所が見えないね。足を広げてごらん。膝も広げて。そう」

膝を開いた恰好で脚を開いた優の尻を掴むと、医者が指に軟膏のようなものを掬いゆっくりと指を押し込んだ。

「あっ……ん……」

「ああ、あたたかくて締め付けていい具合の穴だね……感度の検査だからね。声は我慢しないでいいよ」

「ああ……っ、あっ、あっ……」

「性器の勃起を確認しました」

横で見守っていた男が優の様子を白衣の男に伝えると、白衣の男が笑みを浮かべて頷いた。
「浅葱さん、気持ちいいんですね」

「あつ、あつ、わかんな……あああつ！」

ズンズンと指で突かれ小さな絶頂を迎えた優が答えると、医者が笑みを浮かべながら優に声をかけた。

「それは気持ちいいって言うんだよ。ほら言ってごらん、気持ちいい、気持ちいい」

「あつ、気持ちいい……あつ、あつ、気持ちいい……あつ、ああんっ」

「君のお尻は性器なんだ。だけどまだ未熟で経験が足りないんだ。これから治療をして、いい性器になろうね」

「ああ……っ、はい……あつ、あつ、あつ……」

「今日のところはここまでにしておこうね。帰り道欲求不満になって、明日の朝痴漢が待ち遠しくなるように。さあ服を着て」

医者が指を引き抜くと、ガクンとその場にへたり込んだ優がのろのろと立ち上がり服を着こみはじめた。

「ちゃんと着たかい。それじゃ催眠を解くよ」

パチンと医者が指を鳴らすと、ハツとなった優がきよろきよろと辺りを見回した。

「今日の治療はここまでです。ゆっくり治していきましょう。また来週来てくださいね」

「はい」

よくわからないといった様子で首を傾けて診察室を出て行った優が見えなくなると白衣の男